



現存する提灯(上)、報知新聞社船橋支局主催による祝賀懸賞写真募集で特選になった写真(右上)、東京日日新聞の号外(右下)

市制施行70周年を迎えて 未来に向けて 新たな一歩を

今日、私たちのまち船橋市は、市制施行70周年を迎えました。

この記念すべき年を市民の皆様とともに祝いしようと、多彩な催しを行います。

10月2日から開催する「全国都市緑化ふなばしフェア」では、市民の皆様のご協力を得て、主会場のアンデルセン公園だけでなく、市内を花と緑で飾りたいと考えております。ぜひご参加ください。

さて、船橋市は、昭和12年4月1日に2町3村が合併し、県内で4番目の市として誕生しました。その後、戦争による混乱期を経て、日本の高度成長に歩調を合わせた、大規模団地の相次ぐ造成、全国でも例をみない鉄道網の整備、大型商業施設の進出など、まちは目まぐるしく移り変わりました。当時は約4万3000人であった人口も、今では57万人と全国でも有数の都市に成長しました。

平成15年には、千葉県で初の中核市に移行したほか、フェイスビルの完成や京成本線の高架化(18年)など、本市はさらに大きく発展を続けています。

これも、それぞれの時期に幾多の困難を乗り越えて、今日の繁栄の礎を築いてこられた市民の皆様のご尽力によるものです。

この節目となる年をきっかけに、船橋市が未来に向けてさらに大きく飛躍できるよう、市民の皆様と力を合わせて新たな一歩を踏み出しましょう。



船橋市長
藤代孝七

70年ぶりに 火が灯った提灯

昭和12年4月1日の市制施行当日、新聞社が号外を出し、飛行機からは祝賀のピラがまかれ、新市民は船橋市誕生を大いに喜びました。

前年には、二・二六事件が起こり、日本は戦争への道を突き進んでいた時期でしたが、1日の式典に続き、2日には、仮装行列が意気揚々と練り歩いたそうです。3日には、市民総出の提灯行列が行われ、祝賀ムードは最高潮に達しました。

その間、民家の軒先には、「祝市制」の文字が描かれた提灯が飾られ、お祭り気分を盛り上げていました。この市制施行の様子を目撃した提灯が大切に保存されていました。次ページの「私と船橋」をご覧ください。

姉妹友好都市からメッセージが寄せられました

アメリカ合衆国 ハイワード市長
マイケル・スイニー



ハイワード市とハイワード市民を代表し、心よりお祝い申し上げます。

1986年以来、両市は、教育や経済等の交流を通じ、理解を育んできました。その結果、両市の友情は世界平和を促進し、今では国際

交流の模範となるほど、深く揺るぎないものとなっています。

今後もお互いの協力と恒久的な絆により、両市の市民の間にある結びつきは、さらに堅いものになるでしょう。

今年の10月の祝賀行事には、妻とともに再び船橋市を訪れ、皆様にお会いし、長年にわたる友情を新たにすることをとても楽しみにしています。

デンマーク王国 オーデンセ市長
ヤン・ボイエ



オーデンセ市を代表し、心よりお祝い申し上げます。

船橋市は活気にあふれ、姉妹都市関係の発展のため、精力的に活動しています。1989年からの姉妹都市交流を通じ、オーデンセ市はこれまで多くの船橋市民の皆

様をお迎えしてきました。また、文化・福祉・スポーツ・教育などの分野で協力と対話を着実に進めています。

オーデンセ市は、これから先もこの協力関係を継続するため、できるだけのことをしていくつもりです。

10月に船橋市を訪れ、市制70周年を多くの船橋の友人たちとともに祝うことを楽しみにしています。

中華人民共和国 西安市長
陳宝根



西安市人民政府と西安市750万市民を代表し、熱烈な祝賀の意を表します。

船橋市は首都圏の中核を担う重要な都市として、文化・教育・都市基盤整備など、様々な分野で発展を続け、友好都市の市長として、

大変うれしく思っています。

両市は1994年に友好都市を結んで以来、幅広い分野で交流と協力を繰り広げてきました。その結果、友好関係はさらに発展し、両市民の友情は一層深まりました。

今年は、両国の国交回復35周年という記念すべき年でもあります。私は、引き続き両市の友好交流を積極的に進め、両国のさらなる繁栄と友好のために貢献したいと考えています。

市制70周年 特別企画

私と船橋

その1

船橋市の70年の歴史とともに、市民の皆さんにはかけがえのない人生という歴史が刻まれてきました。船橋にまつわる皆さんの思い出や写真、品物を募集したところ多数のご応募をいただきました。今回から連載でご紹介します。船橋のあのころを一緒に振り返ってみませんか。



4月2日に行われた仮装行列では、派手で奇抜な衣装を身につけた市民の皆さんが、本町通りを練り歩いたそうです。写真には市制施行を飾った提灯が見えます。

船橋市誕生を目撃した 提灯を市に寄付

桑島功さん 桑島妙子さん(宮本6)



「納言を片付けていたら、和紙にいいねいに包まれた提灯が二つ出てきたんです」と話す桑島妙子さん。船橋で代々動物病院を営む桑島功さんの自宅で、妹の妙子さんが市制施行時に飾られた提灯を偶然見つけました。
70年ぶりに出てきた提灯には「祝市制」の文字とともに、市制施行に伴い新たに制定された市章と、日の丸が描かれていました。「所々、傷んでいるけど、市制施行の季節に合わせた桜の模様が見事だね。当時の写真の提灯と比べると、書体も同じでした。」
功さんは、動物病院の4代目。このような提灯が保存されていることは、先代からまつたく聞かされていなかったそうです。
「市制70周年を迎えようという時期に偶然見つかったのも、何かの巡り合わせだね。愛する船橋のために、この提灯を市に寄付するよ。元氣なまちづくりのために活用してほしい。」
動物病院は、今では息子さんの引き継がれましたが、「まだまだ現役だよ。今朝も、ねこの手術を手がけたんだよ。経験がものを言うからね」と功さんが豪快に話してくれました。

▶東京朝日新聞の号外を飾った写真



行田無線塔が 消えゆくときに

永峯正義さん(藤原6)



「JR西船橋駅近くのアパートにやって来たのは、昭和46年の夏でした。君津出身の永峯さんは、岐阜で新聞記者としてスタート。その後、千葉市を経て初めて船橋に移り住みました。ニイタカヤマノボレの行田無線塔が近いと聞いて、さっそく行田方向に車を走らせました。鎌ヶ谷方面につながる細い道路を北上すると、数本の鉄塔が見え、カメラのシャッターを押していたそうです。」
「敷地には、まだ木造平屋のグレーの建物が1棟ありましたが、撤去工事はすでに始まっていましたね。」
間もなく、跡地では住宅公園の団地造成が始まり、現在の行田団地が誕生しました。



4真珠湾攻撃(昭和16年12月8日)にあたり、「ニイタカヤマノボレ」の暗号が発信された東京海軍無線電信所船橋送信所の無線塔。46年5月から12月にかけて解体されました。

産業まつりの写真が コンテストで入賞

中村隆次さん(宮本8)



20代後半からカメラに魅了されたという中村さん。「昭和35年ごろ、カメラはとて高価な物でね、趣味がカメラだという、それは同時に道楽息子というレッテルを貼られてしまうような時代で...でも、初めて自分のカメラを手にした時は、本当にうれしかったですよ。」
その後、7台のカメラを新調し、スポーツや風景、動物など様々な作品を撮影。「市内の移り変わる風景や、イベントなども撮ってきました。産業まつり(現市民まつり)のコンクールでは、最優秀賞を3度もいただきました。観光パンフレットの表紙に採用されたものもあるんですよ」と笑顔で話す中村さん。
現在は、趣味の写真サークルの講師を、ボランティアで引き受けたり、5年間、会長を務めている地元自治会の行事でも、カメラの腕前を発揮しています。
中村さんのアルバムには思い出とともに、移りゆく船橋が収められています。



▶昭和44年、第2回産業まつりの様子。花笠の子どもたちの写真が、翌年、観光パンフレットの表紙になりました。



◀昭和42年冬、長女の幸子さんが2歳の時に自宅前で



昭和40年10月に高野台(当時は八木が谷町)に新居を構えた岡野さんご夫婦。住み始めたころは、人家もまばらで、道路も舗装されていなかったそうです。「冬は寒くて、よく大雪が降り、雪かきが大変でした。雪が溶けた後はどろんどろん」と笑う勝治さん

人家がまばらだった昭和40年ごろ

岡野勝治さん 民子さん(高野台4)

「69歳で退職するまで、市内の印刷会社に通っていました。民子さんは、「子どもたちは自然豊かな環境の中、大喜びで遊んでいました。家の前は車も通らず、安心でした。裏が雑木林で、山芋掘りや、栗拾いとのびのび育つことができました」

その後、移り住む人も増え、昭和50年ごろからは下水道や道路舗装も進み、今では、すっかり便利な場所になりました。「あんなのどかな風景は遠い過去の思い出ですね。最後にご夫婦は、「3人の子どもはそれぞれ独立。正月には、7人の孫も集まり、とてもにぎやかですよ」と笑顔で話してくれました。

まちの移り変わりを記録して50年

手塚博禮さん(千葉市)



「市制70周年の広報特集号に自分の写真を活かしてもらいたいですね」と応募の動機を話してくれた手塚さんは、市内で小学校の校長を長く務めていました。社会科の授業の教材として使うため、市内の写真を撮り始めたのが約50年前。それからは、どこへ行くにも愛用のコンパクトカメラを離さず、撮った写真は30万枚を超えるそうです。

4年前には、過去に撮った場所を同じアングルで改めてカメラに収めた「船橋の定点撮影」を発刊しました。まちの移り変わりが一目でわかる写真集です。「生活の様子や人々の表情、建物、あらゆるものが被写体になります。記録し続けることが大切なんです。」



◀海老川河口付近(昭和29年6月撮影)



本町通りから船橋駅方面を見た光景(現在のスクランブル交差点付近から)。にぎやかな商店が連なり、自動車の通行はまだ少なかったようです(昭和27年12月撮影)



▶昭和40年ごろ。津田沼方面へ向けて、海老川の鉄橋を渡るSL

宮本で生まれ育つた鈴木さんの遊び場は、まだ堤防もない海老川と、その上を走る総武線の土手でした。



鈴木一雄さん(飯山満町2)

「海老川にはしじみもいて、今では信じられないほど清らかな流れでした。土手では、ボール紙で草滑りなどをして、暗くなるまで友達と遊んでいましたね。夕方には、電車の合間にやって来るSLをよく見ていたそうです。ゆっくりと走るSLの乗客から「こんな線路端で何をしているんだい」などと声をかけられることもあったとか。

鈴木さんは、高校時代、全国のSLを追いかけて歩くほどの鉄道ファンに。平成12年には、写真集「遠い汽笛」を発刊しました。

「SLの魅力は、1人では動かせないし、水と石炭がないと動かない。そんな融通の利かないところ、人間味や温かさを感じるんです」

「Rの車掌として働く鈴木さん。休日には、今でもカメラ片手に出掛け、写真を撮り続けています。」

SLが走る線路沿いの土手が遊び場でした



◀大勢の人々がグラウンドいっぱい集まり、子どもたちの演技を見守っています(昭和17年13年ごろ)

父の遺品に70年前の宮本小学校の写真が

渡辺祐司さん(八千代市)

2年前に亡くなられたお父さん(豊松さん・大正7年生まれ)の遺品であるアルバムを整理していた時に、発見された1枚の写真。裏書きには、叔母の名前と



千葉県東葛飾郡船橋尋常小学校(現宮本小学校)という学校名が記されていたそうです。「さっそく、叔母(昭和3年生まれ)に写真を見せたところ、小学2年から3年の運動会で、春の小川を踊った時ではないかと言っていました。当時は娯楽も少なく、小学校の運動会といえば、町内では大きなイベントだったようです。それと、昭和12年の市制施行を祝った



▶遺品のアルバムに見入る渡辺さん

提灯行列や仮装行列が盛大に行われたのは覚えていたとのことでした。渡辺さん(昭和22年生まれ)は、16歳まで宮本に住んでいました。「宮本小に通っていたんですけど、途中で峰台小(昭和30年開校)への分校が決まりました。でも、峰台小が完成するまでの間、仮校舎で勉強したことや、歩いて行ける所にも館あった映画館に、よく見に行ったことが思い出されますね。」

8月19日~26日

少年の船 上海へ航行

少年の船実行委員会 事務局(青少年課内) ☎436-2903



8月19日に船橋港を出る客船「ふじ丸」

8月19日から26日まで、中国・上海市へ、第5回船橋少年の船を派遣します。少年の船は、船橋の未来を担う子どもたちに国際的視野を広げてもらうために、実施するものです。

船上では船や自然、中国語などを学ぶ研修のほか、レクリエーション、軽スポーツなどを行い、子どもたちや青少年指導者の皆さんが、連帯感と友情を深め合います。



甲板でのレクリエーション

上海市では、少年宮(課外活動施設)などを訪問。同世代の子どもたちとの交流を通して中国の歴史・文化に触れ、友好と国際理解を深めます。市内見学なども予定しています。
(応募資格)健康な小学校5年~高校1年生で、派遣終了後もその成果を活かせる人 事前研修会等に参加できること
(募集人数)男女各240人(広域募集、青少年団体による推薦を含む) 多数は4月21日(土)午後所不要へ 持参も可

ふなばし写真伝承

~明治・大正・昭和の残映~

視聴覚センター ☎422-7731

〈期間〉4月27日(金)まで (土)休
〈会場〉市役所1階美術コーナー



写真に残る船橋の歴史や文化、市民の生活を、デジタルプリントや巻物風の展示46作品(写真245枚)で振り返ります。



- 6月24日 NHK巡回ラジオ体操(運動公園)
- 7月1日 吉田裕史氏(船橋出身)の指揮・解説によるミニオペラ(市民文化創造館)
- 8月12日 テレビ東京、出張!なんでも鑑定団 in 船橋(収録)(市民文化ホール)
- 9月2日 NHKのご自慢(船橋アリーナ)
- 10月2日 花と野菜のフェスティバル(農業センター)
- 10月6・7日 スポーツの祭典(運動公園)
- 10月19日 市制70周年記念式典(市民文化ホール)
- 12月1日 武藤英明氏(船橋吹奏楽団出身)の指揮によるチエコ・プラハ管弦楽団演奏会(市民文化ホール)

他にもいろいろなイベントを開催します

70

周年を彩るイベント



10月2日~11月4日 アンデルセン公園 ほか

全国都市緑化フェア実行委員会事務局 ☎456-7790

緑豊かなうらおいのある都市づくりを進めるため、「全国都市緑化ふなばしフェア」を開催します。主会場となるアンデルセン公園で様々なイベントを実施するほか、「まちかどフェア」として地域の花壇や庭園なども会場とし、市全体を100万本の花と緑でいっぱいになります。

ワンパク王国ゾーン アドベンチャー

おやゆび姫がお出迎え!絵本の形をした花壇やオブジェ(立体作品)、自治体のPR花壇などがある広いエリアで、のびのびと遊べます

太陽の池ゾーン フレンドリー

自然と友だちになろう!太陽の池や里山の水辺に親しみ、身近な自然と触れ合うことができるほか、新しい技術を採用した庭園などを紹介します

子どもたちの幸福な未来

~アンデルセンから、世界の子どもたちへの贈りもの~

子ども美術館ゾーン フューチャー

つくって遊ぼう!子どもたちが飾りつけた花いっぱいの空間で、ツリーハウス・秘密基地作りなどの創作プログラムが楽しめます

メルヘンの丘ゾーン ファンタジー

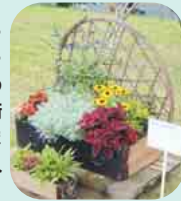
妖精の森ってどんなところ?不思議な音のする森や、アンデルセン童話をイメージした、子どもから大人まで楽しめる庭園を演出します

参加者を募集します

あなたの花で会場を飾ろう

市民ガーデン:太陽の池周辺に花壇を制作します/30区画
寄せ植えガーデン、ハンギングバスケット:太陽の池周辺や、太陽の橋の欄干を飾ります/会期の前・後半に各100基ずつ

花のショーケース:生け花やアートフラワーなどの作品を子ども美術館内に展示します/15団体(個人も可)



寄せ植えガーデン

フェアを盛り上げよう!

イベント出演者:イベントドーム(屋内)や水上ステージ(太陽の池・屋外)で、伝統芸能や音楽、ダンスなどを披露してみませんか/午前10時~午後3時/各日3組程度

全国のお客さまをおもてなし

サービスボランティア:ベビーカーや車いすの貸し出し、迷子への対応など/各日6~9人程度
花緑ボランティア:花壇の手入れ、水やりなど/各日10人
☑いずれも16歳以上/午前8時30分~午後4時30分

我がまち・我が家もフェア会場! まちかどフェア

地域やご自宅を花で飾り、全国にアピールしませんか。

花いっぱいまちづくり:15平方メートル以上の花壇・庭園を、地域の5人以上のグループで造ります 植物、材料費の一部を支給/40か所/フェア会場として認定し、まちかどフェアマップに掲載。コンテストを実施します
花自慢まちかどフェア:自宅の玄関先や店先などを、花壇やハンギングバスケット等で飾ってください/700か所/フェアの認定プレートを進呈



ハンギングバスケット

由 花のショーケースは4月27日(金)、その他は6月29日(金)(いずれも必着)まで。募込 集案内・申込書はアンデルセン公園、みどり推進課、各出張所・公民館で配付。み ホームページ(<http://www.hanafesta-funabashi.jp>)からも取り出せます